

2006 みんなが主役の環境教育シンポジウム 第1回「富山」  
～エコライフスタイルを進めよう～  
(実施報告)

シンポジウム当日は、現在富山県が推進中の「とやまエコライフ・アクト10宣言」を紹介するコーナーが設けられ、宣言活動への参加登録の受け付けが行われた。

プログラム

- (1) テーマ みんなが主役の環境教育シンポジウム  
～エコライフスタイルを進めよう～
- (2) 参加人員 150名
- (3) 日時 平成18年11月25日(土)13:00～17:00
- (4) 場所 ボルファート とやま 2階多目的ホール(富山市奥田新町8-1)
- (5) 参加費 無料
- (6) プログラム
- 12:30 開場
- 13:00-13:05 開会:主催者挨拶 財団法人日立環境財団
- 13:05-13:15 ご挨拶:石野 耕也 氏(環境省大臣官房審議官)
- 13:15-14:10 基調講演「ごみはすてきな魔法つかい-3Rの推進に向けて-」  
講師 松田美夜子氏(富士常葉大学 教授)
- 14:10-14:25 ポスターセッション
- 14:25-17:00 パネルディスカッション  
コーディネータ:田浦 健朗 氏(NPO法人気候ネットワーク事務局長)  
パネリスト:清水 文清 氏(富山県生活協同組合連合会 専務理事)  
鶴澤 靖彦 氏(住友林業(株)住宅本部資材物流部 グループ  
マネージャー)  
三神百合子氏(グリーンコンシューマーネットワーク とや  
ま 代表)  
綿貫 攝 氏(北陸電力(株)執行役員 技術開発・環境保全セ  
ンタ長)  
掘 武司氏(富山県生活環境文化部 環境政策課長)
- 17:00 閉会  
(なおポスターセッションは、基調講演・パネル討論の時間帯を含め、11:00  
～18:00に開催された。)
- (7) 主催 財団法人日立環境財団、富山県
- (8) 後援 環境省、文部科学省、中部環境パートナーシップオフィス、(社)日本経済  
団体連合会 自然保護協議会、(社)全国環境保全推進連合会、(財)とやま  
環境財団
- (9) 協力 NPO法人環境文明21、(社)産業と環境の会、(株)日立製作所
- (10) ポスターセッション参加団体  
環境省、旭硝子(株)、(株)荏原製作所、NPO法人環境文明21、関西電力(株)、  
九州電力(株)、(株)クレハ環境、(株)神戸製鋼所、SGホールディングス(株)、  
サントリー(株)、新日本製鐵(株)、新日本石油(株)、住友林業(株)、  
中国電力(株)、東京ガス(株)、東京電力(株)、東北電力(株)、トヨタ  
自動車(株)、日産自動車(株)、日本製紙(株)、日本電気(株)、(株)  
日立製作所、富士フィルムホールディングス(株)、(株)ブリジストン、  
北陸電力(株)、本田技研工業(株)  
環境教育ネットワークとやまエコひろば、環日本海トイレフォーラム、NPO  
法人 グリーンアーツコミュニティ利賀、グリーンコンシューマーネットワー

クとやま、三協・立山ホールディングス(株)、NPO 法人 ジュオンネットワーク、生活協働組合 CO・OP とやま、中越パルプ(株)能町工場、(財)とやま環境財団、富山県生活協働組合、(株)中島商店、(財)環日本海環境協力センター、日本曹達(株)高岡工場、北西太平洋地域海行動計画(NPWPAP)地域調整部(RCU)富山事務所、YKK(株)黒部事業所、富山県、財団法人 日立環境財団

基調講演 ごみはすてきな魔法つかい - 3R の推進に向けて -

講師: 富士常葉大学教授 生活環境評論家 松田美夜子 氏

松田氏は、国内・欧米のリサイクル問題のエキスパートとして、既に 15 年にわたり欧米各国の調査活動を続けてきた。その記録写真を用いて、説得力のある講演を展開した。

最初にヨーロッパにおける風力・太陽光発電、バイオマス利用などの自然エネルギー利用の状況を含め、都市開発や観光地の交通システムを含む社会インフラについて先進事例を紹介した。

続いて、3R (Reduce: 発生抑制、Reuse: 再使用、Recycle: 再資源化) の取り組みに関する日本と欧米との違いについて言及した。なかでも発生抑制を優先すべきことを指摘し、缶飲料消費量の日本対ヨーロッパ 19 カ国との比較データや、ホテル内の設備(ごみ回収容器・冷蔵庫の飲料水容器)、スーパーマーケット食料品売り場、ごみ回収への課金システム等、ヨーロッパの先進事例を引用して、リターナブル容器の普及やイベントごみを減らすなど、ワンウェイ容器を使わないライフスタイルへの転換の必要性を訴えた。

最後に、環境を大切に商品を選ぶ消費者(グリーンコンシューマー)の活動の環が拡がり、消費者一人ひとりが買い物の選択力を高めることにより、社会の「主体者」になることの重要性を力説した。

なお基調講演は、下記のレジメに沿い進められた。

1. 環境先進国は今  
オランダの風車のある風景  
環境都市「フライブルグ」のソーラー都市  
バイオマス発電でエネルギーの自立
2. 日本から始まるモットイナイ作戦  
キーワードは 3R (スリーアール)  
3R には優先順位がある  
1) Reduce(リデュース)発生抑制  
2) Reuse(リユーズ)再使用  
3) Recycle(リサイクル)再資源化
3. 3R の推進に向けて  
データでみる容器包装リサイクル  
市民と行政と企業の役割分担  
大量リサイクルの問題点  
地球温暖化とのかかわり
4. これからの廃棄物処理のあり方 中央環境審議会 2004.12.28 の答申  
ごみ有料制の推進  
プラスチックの埋め立て禁止・分別再生利用の推進
5. なぜこのような結論が出たか  
ごみの有料制の推進  
・ これまでの状況  
・ 税金の公平な使い方  
・ 経済的な社会システムの導入  
プラスチック対策  
・ 容器包装リサイクル法の推進  
・ その他のプラスチックの再利用  
・ 最後に残ったものだけを焼却  
・ 熱回収率の設定

## 6. ごみを1割減らすと、どんな効果があるか

日本の年間ごみ処理費  
年間ごみ処理費 2兆1000億円  
1割ごみを減らす効果 2100億円  
年間ごみ排出量  
1日一人当たりごみ排出量 1000g  
1割ごみを減らす効果 100g  
100gのごみの量

- ・ コップ半杯分の水分(生ごみの水切り)
- ・ 食事を作り過ぎない(残飯をださない)

## 7. 私たちから始められること・企業ができること

驚くほど高い容器代  
びんビールを使って得をする  
ペットボトル(1.5ℓ)3本でワイシャツ1枚ができる  
アルミ缶(20g)1個で40Wの電灯を10時間点灯できる  
買い物袋を持って買い物をする(レジ袋1枚作るのに原油20mℓ)

## 8. 環境先進国の取り組み

ごみの有料制が基本  
さらに厳しいごみ回避の取り組み

## 9. 日本の先進地は今

- 横浜市(人口360万人)
- ・ ごみの徹底分別(10分別)でごみ3割削減
  - ・ 2焼却施設の閉鎖(1100億円節約)
- 北九州市(人口100万人)
- ・ ごみの有料制導入(年間45.8億円の経済効果)

## 10. 元気な市民と元気なまち

「ごみダイエット」サポーター宣言

### パネルディスカッション エコライフスタイルを進めよう

コーディネータ: 田浦 健朗 氏(NPO法人 気候ネットワーク事務局長)

パネリスト: 清水 文清 氏(富山県生活協同組合連合会 専務理事)

鶴澤 靖彦 氏(住友林業(株)住宅本部資材物流部 グループマネージャー)

三神百合子氏(グリーンコンシューマーネットワーク とやま 代表)

綿貫 攝 氏(北陸電力(株)執行役員 技術開発・環境保全センタ長)

掘 武司 氏(富山県生活環境文化部 環境政策課長)

最初にコーディネータ田浦健朗氏より、パネルディスカッションの趣旨説明が行われた。

以下は、パンフレット掲載用原稿としてパネルディスカッションの趣旨・進め方に関して田浦氏より事前に提出された原稿のである。

「私たちは、大量の物を生産し消費する工業化された社会で生活し働いています。このような社会の中で、便利な物や莫大な情報に囲まれたライフスタイルが一般的になっています。しかし、このライフスタイルはエネルギーや資源を大量に使い、地球温暖化などの地球規模の環境問題を引き起こしています。多くの方が、このライフスタイルを「エコライフスタイル」に変えることで、社会や経済のあり方を変え、環境問題を解決し、より豊かで持続可能な社会を築くことにつながっていくはずです。

今回のパネルディスカッションでは、エコライフスタイルを進めるために各主体が、どのような取り組みを行っているかについて共有し、課題を出し合い、その克服のためにどのような連携が必要かを議論します。生活に密着した活動や事業に携わっている方々にパネリストをお願いしています。まずその方々に夫々の取り組みを紹介していただき、それをもとに、みんなで取り組むことができる可能性や方法について話し合います。ディスカッションで出された情報やアイデアが、エコライフの広がりや新たな連携した環境活動につながっていくことを目指しています。

### 1) パネル討論の目的

エコライフスタイルを進めるために各主体が、どのような取り組みを行っているかについて共有

し、課題を出し合い、その克服のためにどのような連携が必要かを議論する。

## 2) 進め方

- ・趣旨説明
- ・パネリストからの報告「各主体の取り組みについて概要と成果・課題」
- ・パネリスト間での意見交換「取り組みを広め、より進めるために連携するには」
- ・会場からの質問
- ・まとめ

意見交換では、各パネラーからの報告を受けて、ごみの減量、省エネ、CO<sub>2</sub>削減につながるライフスタイルの推進に関連する取り組み・連携のあり方を検討する。

## 3) 結論

- ・参加者が各主体の取り組みについて理解を深める。
- ・参加者が自らエコライフを実践することや、まわりに伝えていく情報を得る。
- ・富山における連携による新たな活動が生まれるきっかけを作る。」

清水文清氏は、「いつでも、誰でも参加しやすいゴミ減量化推進活動を目指して」と題して、森林資源に恵まれた富山県に密着した樹恩割り箸の取り組みや、デポジット方式リサイクル紙パック弁など、富山大学生協を中心とした環境活動を紹介し、アンケート調査結果から学生に徐々に理解・浸透されていることを示した。

鶴澤靖彦氏は、国産材の利用を重視する住友林業（株）の企業姿勢、同社における環境問題への取り組み、さらには日本の山林の現状について紹介した。そして、森林を育てるには間伐を含め、木を切り、また植えることが必要で、それにより持続可能な森林を育成するとともに、台風などの自然災害を食い止める森林環境が実現できることを示した。

三神百合子氏は、エコライフ講座「まるごとくらし塾」の取り組みとして、エコクッキングの活動では、何でもすぐに購入せず、あえて手をかけて不便さを楽しむことに豊かさがあることを、ゴミダイエット作戦の活動では、Reduce、Reuse、Recycle に Refuse を加えた 4R の活動を推進していることを紹介した。そして「メッセンジャーより実践ジャーになりましょう」と訴えた。

綿貫 攝氏は、「北陸電力におけるエコライフへの取り組み」として、超低燃費車・電気自動車の普及促進、オフィス電気使用量の削減のほか、オフィスごみゼロとリサイクルの活動として蛍光灯・乾電池・作業服・事務用品のリユース・リサイクル、機密文書やプラスチックのリサイクルなど、先進的な取り組み事例を紹介した。

堀 武司氏は、地球温暖化防止のための国民運動「チーム・マイナス 6%」で実施されている 6 つのアクションに、県独自の取り組み 4 項目を加えた「とやまエコライフ・アクト 10」のキャンペーン活動を実施中である旨と、その取り組み内容を紹介し、当該事業を通じてエコライフスタイルの浸透・拡大を目指したいとの決意を述べるとともに、シンポジウム出席者に参加を呼びかけた。

各パネラーからの取り組み内容が紹介されたのち、各団体の活動を進める際のノウハウや苦労談に関する質疑応答、異なった主体間の連携のあり方を含め、エコライフを実践するための課題などに関して熱心な討論が行われた。

後半には会場からも発言があり、パネラーと会場とが一体となりパネル討論は大いに盛り上がった。

約 2 時間半にわたる討論を通じて、シンポジウムのテーマである「みんなが主役となり、家庭や職場など身近なところからエコライフスタイルの実践活動を起こしましょう」を纏めの言葉として、シンポジウムを締めくくった。

